



TITLE:

<雑録> 民生渠に就いて

AUTHOR(S):

H., T.

CITATION:

H., T.. <雑録> 民生渠に就いて. 東洋史研究 1939, 4(4-5): 335-335

ISSUE DATE:

1939-06-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/138807>

RIGHT:

民生渠に就いて

初めて申報館の支那地圖帖を手にして、オルドスの東北角黄河の外側に接してまるで平たいハープのやうな形をした一群の水系を見出した時には全く一驚を吃したものである。その絃にも比すべき南北垂直に鑿たれた十幾條の渠道は、從來の地圖の上では夢想だもし得なかつた所であるから、果してこれが實際のものか否かを疑はせたのであつた。我が國の地圖でこれを採用したのは東方文化研究所の「東亞大陸疆域圖」が最初らしく、從つて屢々同様な質疑に接したのであつた。これは民國十七、八年に亘る旱魃の際、托克托、薩拉齊兩縣の災民を救済する目的を以て綏遠賑務會の手で漑渠の開鑿が計畫された結果なのである。北京の中國華洋義賑會の援助に依つて百萬圓の巨費を費し三年を経て二十年六月大部分の完成を見たので民生渠と名づけられた。南北十四條の渠道によつて黄河の水を引き入れ北の大黒河を放水路としたこの灌漑區は將來の開發を約束された様であつた。しかしこの計畫は難民救済に急であつた爲め測量には著しい缺陷があつた。すぐ翌年から河水の増水に泥土は渠道を淤塞しむしろ氾濫を助長する。あたら名案も一朝の夢と化し去り、民死渠の名を以て呼ばれてゐるといふ。今日に於いては地圖の上に不思議な姿を止めながら無用の長物化してゐるのみである。(T・H)